

# 明日を信じて

県内最大の悲劇と言われる富山大空襲から60年。昭和20年8月2日未明、米軍による約2時間の攻撃で2700人余りの命が奪われ、当時の富山市街地の99.5%を焼損した。続く敗戦の報に県内全体が悲しみにうちひしがれた。だが、県民は失意のどん底から立ち上がり、焼け野原から雄々しい立山の峰々を仰ぎ見ながら、再建に向け歩み始めた。苦難の時代と、復興までの道のりを証言と写真でたどる。



ヤミ市 昭和23年ごろ

食料が次第に乏しくなった戦後、富山駅前の焼け跡にヤミ市とよばれる市場が開かれた。非法な商店ではあったが、配給の食料だけでは到底、市民の胃袋を満たすことはできなかつたために、多くの客でにぎわつた。



焼け野原

昭和20年空襲直後

空襲直後の繩曲輪、丸の内の周辺。市街地はどこも焼け野原か、がれきの山となった。被災者の話では、炎が収まった後も依然として煙がくすぶり続け、性別すら分からぬ黒焦げの遺体があちこちに倒れていたという。富山市がこれまで確認しただけでも2713人が犠牲になるなど、富山県史上、未曾有の大惨事だった。

遺体を積み重ね安置

**証言** 谷代里さん 富山市大島、無職、74歳

当時は田端中町にあった看護婦養成所の寮にいました。空襲の時は夜明けころから次々と負傷者が運ばれてきて、廊下に無造作に置かれました。どうの人もひどいやけど、そのままで息を引き取る人もかなりいました。

私は与えられた仕事をはぐなつた人を安置室まで通ふことでした。担架で何人もの看護にあたりましたが、薬品が足らず、破傷風ではいれんを起こしました。本当に大変なま





商丘大幕成



絵曲輪通り 昭和23年ごろ

富山市街地は壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず、市民の立ち直りは早かった。錦曲輪通りでは早くも商店が建ち並び、多くの買い物客らが足を運ぶなど、戦前にぎわいを取り戻しつつあった。

富山師範学校  
したのは昭和二  
日。富山大空襲  
泊まつた最初の  
夜で、本当に驚  
きました。

51

卷之三

空壕に入りました。私の誕生日は学生寮で、修養の建物に焼夷弾が直撃され、犠牲者が出ました。仲間と壕から飛び出し、近くの川からバケツで

夢中でした。何とか消し止め、仲間も全員無事でしたが、校舎と寮は跡形もなく焼け落ちていました。

夜が明けてから街はさらに悲惨でした。焼夷弾が遺体に突き刺さり、あわててから火煙が上がりついていました。あの修羅場は忘れられません。

死臭漂う中、入浴

原。桃井町の私の家を焼け  
焼け残った柱やトタンなどを  
ラフクを建てて生活してい  
ました。広さ  
は四畳ぐらい  
だったでしょ  
うか。両親、  
姉、私の四人  
で体を寄せ合っていまし  
た。風呂おけの残った家が  
あって、時々、入らせてま  
らいました。死臭漂う中  
入浴でした。

配給の食糧だけでは足りなくて、草の葉なども食べていました。知人の家へ毎日物々交換を行つたこともありましたね。

小学校は焼けだし、まい、不二越の寄宿舎を仮校舎として勉強しました。でも、多くは親せき宅などへ引っ越ししていく、百五十人いた同級生が卒業式は五千人だったのが寂しかったですね。

松村恵美子

バラック

富山大空襲の被災者は10万人を越えるとされている。焼け出された市民はかれきの中からトランや焼け残った材木などを拾い出し、パラックと呼ばれる小屋を建てた。雨露をしのぐ程度の簡単な造りだったが、空襲直後から被災地帯で次々と建ち始め、市民の生活拠点となった。

記憶  
と記録  
上巻 戦後60年